

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 戦時下における自由主義者の行動論理
——豊島与志雄、谷川徹三と中国との関わりから——

氏 名 張 鈴

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、それぞれ文壇と思想界で活躍した小説家豊島与志雄（1890-1955）と哲学者谷川徹三（1895-1989）を取り上げ、それぞれの小説、情勢に関する評論および彼等の周辺にある言説に対するテキストの分析と思想史的な解説を通して、中国を臨む心境、戦時下の思考と行動論理を解明し、戦前自由主義者の日中戦争期における役割を考えるものである。

戦後になって、戦前戦中の自由主義者は「オールド・リベラリスト」と呼ばれるようになり、若い世代の知識人によって棚上げされた。彼らは戦時下において、積極的な意味での革新を図ったが、軍部による圧迫を蒙った。この経験から、彼らには往々にして、戦争責任の自覚が乏しい。一方、彼等の戦前戦中の活動および戦争責任に關しての考察はあまり見られない。このような知識人の戦争責任問題を再考する第一歩は、知識人の戦時下の営為およびその論理を理解することである。本論文は、知識人の行動論理を把握し、それによって、知識人を理解し、戦争責任を追及した上での再評価を求める。このようにして、この論究では、知識人の戦争責任追及問題を、いままでの「協力／抵抗」による戦争責任有無の評価という行き詰まりから脱出させることを試みる。

本論文は以下の幾つかの面において意義がある。第一に、今まで回避されがちだった日中戦争期の日本知識人の中国観を掘り下げたことである。第二に、自由主義の視点を切り口に十五年戦争期の日本文学史を読み直したことである。第三に、従来の日本文学研究と政治思想史研究の領域を横断的に論じたことである。その方法として、本論文は文学作品と評論の文学的価値より、テキスト・記録としての価値を重視した。また、一次資料の発掘に力を入れている。この意味で、本論文は文学研究であると同時に、思想研究でもあり、その両方に貢献できたと考える。

本論文は序章、第一部（第1章から第2章まで）、第二部（第3章から第5章まで）、第三部（第6章から第7章まで）、終章、補論、付録、参考文献、初出一覧からなる。

序章では、本論文の背景、先行研究と方法論、本論文の構成を述べた。

【第一部 戦前戦中期リベラリズム総説】(第1章から第2章まで)は自由主義に関する概説的な論考である。

第1章「十五年戦争期文壇における自由主義概観——谷川徹三、豊島与志雄の再定位——」は、十五年戦争期文壇における自由主義の全体像を三つの時期に分けて、自由主義の発展過程及びその失敗を概観し、そして谷川徹三と豊島与志雄を、戦時下の文壇に再定位した。

第2章「〈教養〉の成立と谷川徹三の青春期」は、明治末期・大正初期に遡って、谷川徹三の中学校から高校までの内面的な成長史とその先輩の経験に対する考察を通して、大正期教養主義の生成を再考した。

あえて本論文が主要な検証対象として設定する時期である十五年戦争期を離れるのは、自由主義は個人主義、個人の教養に基づくものであり、そういった教養を掲げた教養主義者と戦後のオールド・リベラリストの顔ぶれがかなり重なるからである。

【第二部 豊島与志雄 その汎アジア主義】(第3章から第5章まで)は小説家豊島与志雄と中国の関わりから、戦時期の知識人の行動論理を考えた。

第3章「上海 1940——豊島与志雄の視界から——」は、豊島与志雄の1940年3月上海訪問を中心に、史料や証言と照合して豊島の上海理解について考察した。本章は豊島の上海の人々に対する善意と熱意を肯定した上で、上海を見る視線には日本中心的なものが満ちており、現地の知識人との間には大きな隔たりがあったことを批判した。

第4章「豊島与志雄と中国——ある汎アジア主義的な心情を中心に——」は、豊島与志雄の中国人を主人公とする小説を中心に、彼の情勢に対する言論を合わせて、1940年前後、戦争末期、および戦後の1949年の豊島の中国に託した理想を経時的に検討した。豊島は汎アジア主義的な心情を戦前戦後に貫き通し、主体性のある思考も持っていた。そのことは肯定すべきである。一方、豊島本人は戦争末期の自らの言動を曖昧に糊塗し、戦争責任の自覚の乏しさを示した。この点は批判したい。

第5章「東亜文芸復興の夢——日中戦争期「東亜文芸復興」というスローガンについて——」は「東亜文芸復興」という言葉を巡る、戦争末期の日中両国の思惑を追究した。豊島の評論、中国側のおよび日本側の出版物のテキスト分析を通して、日中の間に共通した西洋への憧れ、日本の日本中心の協力ないし統制の願望、中国における日本への順従／抵抗などの多くの不調和が共存していることが明らかにされた。汎アジア主義的な心情で「東亜文芸復興」の夢を持つ豊島は、不本意でありながら、日本のアジア支配に貢献した。

【第三部 谷川徹三 その文化国際主義】(第6章から第8章まで)は哲学者谷川徹三と中国の関わりから、戦時期の知識人の行動論理を考えた。

第6章「1930年代におけるオールド・リベラリストの東洋言説——谷川徹三の「東洋と西洋」論——」は谷川徹三の1938年から1939年にかけての、三つの同名の論文「東洋と西洋」を中心に、谷川の東洋と西洋の論説群の成り立ちや展開と、その後ろに隠された歴史観・価値観に対する考察を行い、谷川徹三の東洋と西洋論は三木清の世界史の哲学と和辻哲郎の世界史的史観の間で振れ動いていることが分かった。

第7章「谷川徹三の平和主義思想——ラッセル等との比較を中心に——」は戦前戦中における谷川徹三の、著名な平和運動家であるバートランド・ラッセル(1872-1970)への思想的な追随を、1921年ラッセルの訪日、1933年谷川徹三「戦争と思想」の発表、1937年日中戦争勃発、1940年ラッセルの反戦平和主義放棄宣言の公開という四つのコマのピックアップを通して明確にした。同時に、谷川の戦争と平和への賛同が共存している行動論理の構造を明確にした。

第8章「戦時下自由主義の限界——1940年代における谷川徹三の中国旅行と文化交流——」は谷川徹三の中国旅行を概観してから、中国人と関わりがある、中国語に訳された三種類の文章を読解し、戦時下の自由主義の限界を探った。文化擁護という点において、谷川は自由主義者としての限界点に立って、日本占領区の中国知識人と接点をもった。

終章は、本論文各章をまとめてから、自由主義者の時代認識・歴史評価と、日本と中国の知識人の比較論を問題提起し、これからの課題を述べた。

なお、「東洋」(英語の orient、中国語の東方)という概念の日中の間の「言語横断的实践」を考察した一篇の論考「orient と東洋・^{ドンファン}東方」を補論として付した。この論考は日中両国の言葉の繋がりである「東洋」という言葉の意味変遷を考察することを通して、近代日本と中国のアジアを見る異なった視線を歴史的に整理した点で、本論文の視野を広げられると思われる。

最後に、「豊島与志雄 1940年3月中国訪問ノート」及び翻刻、解題を資料として付した。

本論文は以上のように、自由主義知識人の概観および豊島与志雄、谷川徹三の位置づけを明確にした上で、豊島、谷川の戦時下での違う行動論理を検討した。二人はともに、中国に対して友好的である。豊島は汎アジア主義的な心情で中国社会を見ていたが、中国の全体像は見逃した。また、自由を意識しながら、軍部の政策に接近し、戦争の間最後まで発言し続けた。一方、谷川徹三は文化国際主義のアプローチで中国に近づき、最初は日本の特殊性を強調したが、中国訪問を通して考えを変え、日本の特殊性を否定的に見るようになった。1943年から終戦まで、谷川は傍観者になった。

両者の戦時下の活動をいかに判断すべきか。二人の日中友好を願う気持ちは、まず肯定すべきである。二人は軍部へ向かって違う軌跡を描いた。豊島には理想が軍部に流用された責任があるが、谷川にも、公の場での反抗を放棄した一定の責任がある。